

日韓両言語のいわゆる対格助詞「ヲ」と 「ul/lul(을/를)」について

金 榮敏

キーワード：対格、ヲ格・「ul/lul」格、主題マーカ―の「ul/lul」、二重対格構文

0 はじめに

日本語と韓国語は両言語の歴史的な系統関係はいまだに明確にされていないものの、両言語が数多くの類似点を有していることは既に明らかになっている。殊に文法のレベルにおける類似性は著しいものである。しかし、先行研究からもわかるように、文法のレベルにおいても実際細部にわたって考察してみると両言語には類似点のみではなく相違点もかなり多く観察される。

本稿ではこういった事実に基づいて、日韓両言語のいわゆる対格助詞「ヲ」と「ul/lul(을/를)」を取り上げ、対照分析を行い、その類似点と相違点の一部を明らかにすることを目的とする。

1 「ヲ」と「ul/lul(을/를)」の対照分析における問題点

対格助詞は日韓両言語のみではなく、普遍的に動詞の表わす動作・行為の対象になる名詞句に構造的に付与され、その名詞句が文中で目的語として働くことを示す。次の(1)はその典型的な例である。

- (1) a. 太郎が花子を殴った。
b. 타로가 하나코를 때렸다.
Taroo-ka Hanako-lul ttayli-ess-ta.
太郎-ガ 花子-ヲ 殴る -タ

ところが、日韓両言語のいわゆる対格助詞「ヲ」と「ul/lul」には目的語を示すという働き以外のものも観察される。

- (2) a. 太郎が部屋を出ていった。
b. 타로가 방을 나갔다.

Taroo-ka pang-ul naka-ss-ta.
太郎-ガ 部屋-ヲ 出ていく-タ

(3) a. 三人の学生が橋を渡ってきた。

b. 세명의 학생이 다리를 건너 왔다.

semyeong-uy haksayng-i tali-lul kenne wa-ss-ta.
三人-ノ 学生-ガ 橋-ヲ 渡って 来る-タ

(2) (3)に現れる「ヲ」や「ul/lul」名詞句は移動動詞の必須項ではあるが、動詞の表す動作・行為の対象ではなく、移動の起点(2)、経路(3)を表している。

更に、韓国語には(1)や(2)(3)とはまた違う働きをしていると考えられる「ul/lul」が見られる。

(4) a. 타로는 10시간(을) 계속 서 있었다.

Taroo-nun yelsikan(-ul) kyeysok se iss-ess-ta.
太郎-ハ 10時間(-ヲ) ずっと 立って いる-タ

b. 太郎は10時間(*を)ずっと立っていた。

(5) a. 타로가 하나코의/를 손을 잡았다.

Taroo-ka Hanako-uy/-lul son-ul cap-ass-ta.
太郎-ガ 花子-ノ/-ヲ 手-ヲ 握る-タ

b. 太郎が花子の/*を手を握った。

(4) aは韓国語では副詞の働きをする、時間を表す名詞句等にも「ul/lul」が現れることを示しており、(5) aは属格助詞の代わりに「ul/lul」が用いられることを示している。このような現象は(4) b (5) bからわかるように日本語には見られない。

以上の観察から、日韓両言語のいわゆる対格助詞「ヲ」と「ul/lul」を対照分析するに当たって、次のような二点が問題になると考えられる。

①目的語を表す「ヲ」「ul/lul」とその他の場合の「ヲ」「ul/lul」とを同様に対格助詞と見なすべきか。

②更に後者を対格助詞でないと見なす場合、日韓両言語に現れる(2)(3)のようなタイプの「ヲ」「ul/lul」と韓国語のみに現れる(4)(5)のようなタイプの「ul/lul」とを同質のものと見なすべきか。

次節では、まずこの二点の問題に関して、先行研究をもとに考察し、「ヲ」と「ul/lul」の下位分類を行う。

2 「ヲ」と「ul/lul(을/를)」の下位分類

前節の(2)(3)の「ヲ」格・「ul/lul」格名詞句は、動詞の表す動作・行為の対象を表す

のではなく、移動の起点、経路を表す。日本語において、奥津(1967)、杉本(1986)はこのような移動動詞構文に現れる「ヲ」格名詞句と目的語を表す「ヲ」格名詞句とを分けて考える必要があるとし、次のような統語的根拠をあげている。

- (6) a. 富樫ハ 義経ヲ 弁慶ヲ 通シタ。
 b. 富樫ハ 義経ト弁慶ヲ 通シタ。
 (7) a. 富樫ハ 弁慶ヲ 安宅ノ関ヲ 通シタ。
 b. *富樫ハ 弁慶ト安宅ノ関ヲ 通シタ。 (奥津1967)

奥津(1967)は、(6) aは明らかに目的語の繰り返された文であり、並列助詞の「ト」を使った(6) bに転形できるのに対して、(7) aは(7) bに転形できないため、(7) aの中の二つの「ヲ」格名詞句は、その文法的機能を異にするものであるとしている。そして(7) aの「安宅ノ関」は目的語でなく、「弁慶」の移動が行われる場所を示すものであると述べている。また、杉本(1986)は次のような例文の比較を通して、移動動詞が被使役主の「ヲ」格マーキングにおいて、他動詞ではなく、自動詞と同じパターンを示すことを指摘している。

- (8) a. 選手が毎日毎日グラウンドを走った。
 b. コーチは選手を毎日毎日グラウンドを走らせた。
 b'. コーチは選手に毎日毎日グラウンドを走らせた。
 (9) a. 生徒達が山の頂上で休んだ。
 b. 先生は生徒達を山の頂上で休ませた。
 b'. 先生は生徒達に山の頂上で休ませた。 (杉本1986)

そして、これは、移動動詞が他動詞ではなく、自動詞であり、移動動詞構文に現れる「ヲ」格名詞句が目的語として機能していないことを示すものであると述べている。

奥津(1967)、杉本(1986)はこのような考察を通して、目的語を表す「ヲ」格を「対格のヲ」、移動動詞構文に現れる「ヲ」格を「移動格のヲ」とし、両者を別のもつと見なしている。本稿でも基本的には奥津(1967)、杉本(1986)に従い、両者を区別して議論を進める。以下、便宜上「対格のヲ」を「対格」と、「移動格のヲ」を意味格*1の「ヲ格」もしくは単に「ヲ格」と呼び、両者を同時に言及するときは「ヲ」と呼ぶことにする。

韓国語においても移動動詞構文に現れる「ul/lul」格名詞句と目的語の「ul/lul」格名詞句とは統語的振る舞いが異なる。次の例文のように場所を表す「ul/lul」格名詞句は並列助詞 'wa(와)' (=ト)による転形ができない。また、受動文の主語にもならない*2。

- (10) a. 어머니가 타로를 학교를 보냈다.
 emeni-ka Taroo-lul hakkyo-lul ponay-ss-ta.
 母-ガ 太郎-ヲ 学校-ヲ 行かせる-タ
 '直訳：母が太郎を学校を行かせた。'
 b. *어머니가 타로와 학교를 보냈다.

*emeni-ka Taroo-wa hakkyo-lul ponay-ss-ta.
 母-ガ 太郎-ト 学校-ヲ 行かせる-タ
 '直訳：母が太郎と学校を行かせた。'

(11) a. 타로가 저 다리를 건넜다.
 Taroo-ka ce tali-lul kenne-ss-ta.
 太郎-ガ あの 橋-ヲ 渡る-タ
 '直訳：太郎があこの橋を渡った。'

b. *저 다리가 타로에 의해 건너졌다.
 *ce tali-ka Taroo-ey uhay kenne-ci-ess-ta.
 あの 橋-ガ 太郎-ニヨotte 渡る-ラレ-タ
 '直訳：あの橋が太郎によって渡られた'

従って、韓国語の「ul/lul」に対しても、日本語の「ヲ」と同様、目的語を表す「ul/lul」と移動動詞構文に現れる「ul/lul」とを区別し、前者を「対格」、後者を意味格の「ul/lul格」もしくは単に「ul/lul格」と呼ぶことにする。なお、両者を同時に言及する場合は「ul/lul」と呼ぶ。

ところが、韓国語の「ul/lul」に関して、任(1972, 1987)、李(1988)は目的語を表す対格の「ul/lul」以外のすべての「ul/lul」を主題マーカ―とみなし、「ul/lul」主題化の意味を次のように規定している。

- (12) a. 非対照的対立の意味特性を持つ。*3
 b. 言及対象性を持つ。
 c. 特定性を持つ。

このような任(1972, 1987)、李(1988)の分析は、韓国語の「ul/lul」が前節にあげた(4)(5)や次の(13)(14)のような文において副詞、数量詞、副詞化補文標識等と一緒に現れたり、属格の代わりに現れる現象を説明するためのものであると考えられる。

(13) 타로가 물고기를 열마리(를) 잡았다.
 Taroo-ka mwulkoki-lul yelmali(-lul) cap-ass-ta.
 太郎-ガ 魚-ヲ 十匹(-ヲ) 捕る-タ
 '直訳：太郎が魚を十匹(を)捕った。'

(14) 어머니가 타로를 책을 읽게(를) 하였다.
 emeni-ka Taroo-lul chayk-ul ilk-key(-lul) haye-ss-ta.
 母-ガ 太郎-ヲ 本-ヲ 読む-補文詞(-ヲ) する-タ
 '直訳：母が太郎を本を読むように(を)した。'

任(1972, 1987)、李(1988)の分析においては、移動動詞構文に現れる「ul/lul」も主題マーカ―の「ul/lul」と見なされているが、この点に関して本稿では任(1972, 1987)、李(1988)と意見を異にする。つまり、上に言及したように、移動動詞構文に現れる「ul/lul」は主題マーカ―でなく、格助詞であるとする。そして、目的語を表す「対格」と移動動詞

構文に現れる「ul/lul格」以外の「ul/lul」のみを主題マーカールと見なす*4。本稿で移動動詞構文に現れる「ul/lul格」を主題マーカールと見なさないのは、この「ul/lul格」が付与される名詞句が動詞の必須項であり、特にその「ul/lul格」名詞句の中には他の意味格との格交替を許さず、専ら「ul/lul格」のみによって格標示される場合（[経路]を表す場合：3節で後述）もあるためである。更に、移動動詞構文の「ul/lul格」名詞句には、任(1972, 1987)、李(1988)が「ul/lul」主題化の意味としてあげている(12) a, b, cのような意味も感じられない。

以上に見るように、日韓両言語の「ヲ」と「ul/lul」はその働きの違いをもとに、日本語の「ヲ」は「対格」と「ヲ格」に、韓国語の「ul/lul」は「対格」「ul/lul格」と主題マーカールの「ul/lul」に下位分類できると考えられる。

3 移動動詞構文に現れる「ヲ格」と「ul/lul(을/를)格」

3.1 分布

移動動詞の必須項である場所を表す名詞句は、常に「ヲ格」や「ul/lul格」によって格標示されるのではない。

- | | |
|----------------------------|--------|
| (15) 太郎は診察室から/を出た。 | <起点>*5 |
| (16) 子供達は一列に並んで狭い橋*で/を渡った。 | <経路> |
| (17) 太郎は学校に/*を到着した。 | <着点> |

日本語では上記の例に見るように、移動の[起点]は「から」格と「ヲ格」の両方で標示できる。一方、移動の[経路]を表す場合は、専ら「ヲ格」のみが許される。そして、移動の[着点]を表す場合は、「ヲ格」は許されない。

韓国語においても、同様な現象が観察される。次の(18)～(20)は(15)～(17)の日本語の例文に対応する文である。

- | | |
|---|------|
| (18) 타로는 <u>진찰실에서</u> 을 나왔다. | <起点> |
| Taroo-nun cinchalsil-eyse/ul nawa-ss-ta. | |
| 太郎-ハ 診察室-カラ/ヲ 出る-タ | |
| (19) 어린이들은 한줄로 늘어서서 좁은 다리* <u>에서</u> /를 건넜다. | <経路> |
| elini-tul-un hancwul-lo nulese-se copun tali-*eyse/lul kenne-ss-ta. | |
| 子供達-ハ 一列-ニ 並んで 狭い 橋-* <u>데</u> /ヲ 渡る-タ | |
| (20) 타로는 학교에/*를 도착했다. | <着点> |
| Taroo-nun hakkyo-ey/*lul tochakhay-ss-ta. | |
| 太郎-ハ 学校- <u>에</u> /*ヲ 到着する-タ | |

上記の(15)～(17)及び(18)～(20)の例を見る限り、日韓両言語の移動動詞構文における

場所名詞句の格標示パターンは全く同じであるかのように見えるが、韓国語においては、次の(21)のように、着点が他の格助詞以外に、「ul/lul格」で標示される場合もある。

- (21) 타로가 학교에/를 갔다.
 Taroo-ka hakkyo-ey/lul ka-ss-ta.
 太郎 -ガ 学校-ニ/ヲ 行く-タ
 '直訳：太郎が学校に/を行った。'

(21)の例を考慮に入れると、一応日韓両言語は「ヲ格」「ul/lul格」の格標示パターンにおいて着点の場合にのみ違いが見られると言える*6。このような違いは日韓両言語の個別的な特性に起因するものであると説明できるが、ここで問題になるのは、韓国語において、(20)と(21)の場所を表す名詞句がいずれも[着点]を表すにもかかわらず、なぜ(20)の場合は「ul/lul格」で標示されず、(21)の場合は「ul/lul格」で標示されるのかということである。この問題は「ul/lul格」(と「ヲ格」)の持つ意味特性によるものと考えられる。

3.2 「ヲ格」と「ul/lul(을/를)格」の意味

移動動詞構文において[経路]を表す名詞句は専ら「ヲ格」「ul/lul格」のみによって格標示される。従って、この場合の「ヲ格」「ul/lul格」の意味が移動動詞構文に現れる「ヲ格」「ul/lul格」の本質的な意味を示すと考えられる。[経路]名詞句を必須項とする移動動詞には次のようなものがある。

- (22) 越える(=넘다)、経る(=거치다)、渡る(=건너다)、通る(=지나다)、過ぎる(=지나가)다)、抜ける(=빠지다)、横切る(=가로지르다)、曲がる(=돌다)、回る(=돌다)、通過する(=통과하다)、横断する(=횡단하다) 等*7

(22)の移動動詞は共通的に[過程性]の意味素性を持っている。そのため、これらの移動動詞の必須項になる場所名詞句はこの[過程性]の意味素性を保証するものでなければならぬと考えられる。つまり、この場合の場所名詞句は移動の[起点][通過部分][着点]すべてを一まとまりとして表さなければならない。従って、次の例文のように移動の[起点][通過部分][着点]を一まとまりとして表す場所名詞句が現れているにもかかわらず、更に[着点]を表す要素を文中に入れると不自然になる。

- (23) a. *太郎はあの橋を向う側に渡った。
 b. *타로는 저 다리를 건너편에 건넜다.
 *Taroo-nun ce tali-lul kennephyen-ey kenne-ss-ta.
 太郎-ハ あの 橋-ヲ 向う側-ニ 渡る-タ
- (24) a. *太郎はあの山を向う側の村に越えた。
 b. *타로는 저 산을 산너머의 마을에 넘었다.

*Taroo-nun ce san-ul sanneme-uy mau-ey nem-ess-ta.
 太郎-ハ あの 山-ヲ 向う側-ノ 村-ニ 越える-タ

このように、(22)のような〔過程性〕の意味素性をもつ移動動詞は移動の〔起点〕〔通過部分〕〔着点〕を一まとまりとして表す場所名詞句を必須項とする。従って、(22)のような動詞の表す移動は場所名詞句の表す範囲全体にわたって行われるものであり、そういった意味でその場所名詞句に直接的な影響を及ぼすものであると考えることもできる。このように考えると、この場合に専ら用いられる「ヲ格」「ul/lul格」の意味は、「場所名詞句を移動動詞から直接的に影響を受けるものとして対象化する」ことであると見なすことができる。本稿では以上の考察から「ヲ格」「ul/lul格」の意味を「それと一緒に現れる名詞句を対象化する」と仮定し、移動動詞構文において「ヲ格」「ul/lul格」の出現を保証するのは移動動詞の意味素性〔過程性〕であると見なす*8。

以上の考察に基づくと3.1節であげられた問題点に答えを出すことができる。(20)の場合、着点を表す名詞句を「ul/lul格」で標示できないのは‘tochakhata(도착하다)’ (=到着する)という動詞には〔過程性〕の意味素性がないためである。これに対して(21)の‘kata(가다)’ (=行く)という動詞は〔過程性〕の意味素性を持っているため、「ul/lul格」標示ができるのであると考えられる。ただしこのように考えると、今度は日本語では何故‘行く’の〔着点〕を「ヲ格」で標示できないのかというのが問題になるが、この問題は今後の課題にしたい。

3.3 移動動詞構文に見られる主題マーカ―の「ul/lul(을/를)」

韓国語の移動動詞構文には更に他の格助詞と「ul/lul」とが一緒に現れる次のような例が見られる。

(25) 타로가 학교에를 갔다.

Taroo-ka hakkyo-ey-lul ka-ss-ta.

太郎-ガ 学校-ニ-ヲ 行く-タ

‘直訳：太郎が学校にを行った。’

(26) 타로는 학교에(=에를) 도착했다.

Taroo-nun hakkyo-ey-l (=ey-lul) tochakhay-ss-ta.

太郎-ハ 学校-に-を 到着する-タ

‘直訳：太郎が学校にを到着した。’

この場合の「ul/lul」は他の格助詞と一緒に現れるという点から、「ul/lul格」ではなく、主題マーカ―の「ul/lul」と見なすべきであると考えられる。

ところが、このような、移動動詞構文において他の格助詞と主題マーカ―の「ul/lul」が一緒に現れるという現象は、助詞の種類による制約を受けるようである。

- (27) a. ?타로가 집에서를 나갔다.
 ?Taroo-ka cip-eyse-lul naka-ss-ta.
 太郎-ガ 家-カラ-ヲ 出ていく-タ
 '直訳：太郎が家からを出ていった。'
- b. *타로가 집으로를 돌아갔다.
 *Taroo-ka cip-ulo-lul tolaka-ss-ta
 太郎-ガ 家-へ-ヲ 帰る-タ
 '直訳：太郎が家へを帰った'

主題マーカ―の「ul/lul」は(25)(26)の場合のように‘ey(에)’ (=二)とは一緒に現れることができるが、(27) a, bの場合のように‘eyse(에서)’ (=カラ), ‘ulo(으로)’ (=へ)とは一緒に現れることはできない。本稿ではこのような現象があることだけを指摘し、これ以上追求しない。

4 韓国語の主題マーカ―「ul/lul(을/를)」に関する再検討

前節では任(1972, 1987)、李(1988)と意見を異にし、移動動詞構文に現れる「ul/lul」(他の格助詞と一緒に現れる「ul/lul」は除く)を主題マーカ―としてではなく、意味格の「ul/lul格」と見なした。その主な根拠は、移動動詞構文の「ul/lul格」名詞句は動詞によって要求される必須項であり、そのうち専ら「ul/lul格」のみによって格標示される場合(〔経路〕を表す場合)があるということであった。このような観点から見ると移動動詞構文以外の場合においても、任(1972, 1987)、李(1988)によって一括に主題マーカ―とされている「ul/lul」がすべて主題マーカ―であるとは限らないと考えられる。つまり、移動動詞構文以外の場合にも、動詞の必須項である名詞句に現れる「ul/lul」は「ul/lul格」と見なし、そうでない場合の「ul/lul」は主題マーカ―の「ul/lul」と見なすことができると考えられる。

- (28) 타로는 10시간(을) 계속 서 있었다. (=4a) *9
 Taroo-nun yelsikan(-ul) kveysok se iss-ess-ta.
 太郎-ハ 10時間(-ヲ) ずっと 立って いる-タ
 '直訳：太郎は10時間(を)ずっと立っていた。'
- (29) 타로가 하나코의/를 손을 잡았다. (=5a)
 Taroo-ka Hanako-uy/-lul son-ul cap-ass-ta.
 太郎-ガ 花子-/ノ-/ヲ 手-ヲ 握る-タ
 '直訳：太郎が花子の/を手を握った。'

(30) 타로가 물고기를 열마리(를) 잡았다.

(=13)*10

Taroo-ka mwulkoki-lul yelmali(-lul) cap-ass-ta.

太郎-ガ 魚-ヲ 十匹(-ヲ) 捕る-タ

’直訳：太郎が魚を十匹(を)捕った.’

(31) 선생님이 반장으로/을 타로를 뽑았다.

sensayngnim-i pancang-ulo/ul Taroo-lul ppop-ass-ta

先生-ガ 班長-ニ/ヲ 太郎-ヲ 選ぶ-タ

’直訳：先生が班長に/을太郎を選んだ.’

(32) 타로가 공부를 하지(를) 않는다.

Taroo-ka kongpwu-lul ha-ci(-lul) anh-nun-ta.

太郎-ガ 勉強-ヲ する-語尾(-ヲ) ない-ル

’直訳：太郎が勉強をし(を)しない.’

上記の例文(28)~(32)の下線の引かれたところの「ul/lul」はいずれも動詞の必須項でない要素に付加されている。それぞれ、時間を表す名詞句(28)、数量詞(30)、動詞の活用形(32)と一緒に現れたり、属格助詞(29)・資格格助詞(31)の代わりに現れているのである。従って、このような場合の「ul/lul」は、意味格の「ul/lul格」ではなく、主題マーカ어의「ul/lul」であると考えられる。

しかし、次の(33)の下線の引かれた名詞句は動詞の表す動作・行為の[GOAL]を示す必須項であり、‘eykey(에게)’ (=ニ)の代わりに「ul/lul」によっても格標示される。従って、このような場合の「ul/lul」は移動動詞構文に現れる「ul/lul」と同様に主題マーカ어ではなく、意味格の「ul/lul格」と見なすべきであると考えられる。

(33) 어머니가 아이들에게/을 사과를 주었다.

emeni-ka aitul-eykey/ul sakwa-lul cwu-ess-ta.

母-ガ 子供達-ニ/ヲ りんご-ヲ あげる-タ

’直訳：母が子供達に/을りんごをあげた.’

このように考えると(33)の下線の引かれたところの「ul/lul格」にも、「それと一緒に現れる名詞句を対象化する」という意味があると判断されるが、(33)と次の(34)を比較してみるとその判断が正しいことがわかる。

(34) 어머니가 아이들에게/*을 사과를 보냈다.

emeni-ka aitul-eykey/*ul sakwa-lul ponay-ss-ta.

母-ガ 子供達-ニ/ヲ りんご-ヲ おくる-タ

’直訳：母が子供達に/*을りんごをおくった.’

(34)の例文は(33)の動詞‘cwuta(주다)’ (=あげる)のみを‘ponayta(보내다)’ (=おく)という動詞に変えた文であるが、(34)の場合、[GOAL]を表す必須項を「ul/lul格」で標示できない。これは‘cwuta’と‘ponayta’のもつ[GOAL]名詞句に対する意味関係の違い

いによるものであると考えられる。‘cwuta’の場合は「何かをあげる」という動作・行為が[GOAL]名詞句に直接的な影響を及ぼすことが想定できるのに対して、‘ponayta’の場合はそうではない。つまり、‘ponayta’は、例えば目の前にいる人に直接何かを渡すという場合には使えない。そのため、‘ponayta’は[GOAL]名詞句を、「それと一緒に現れる名詞句を対象化する」という意味機能を持つ「ul/lul格」で標示できないのであるが、‘cwuta’は[GOAL]名詞句の「ul/lul格」標示ができるのである。

以上に見るように移動動詞構文以外の場合においても、任(1972, 1987)、李(1988)によって一括に主題マーカ―と見なされている「ul/lul」が主題マーカ―の「ul/lul」と意味格の「ul/lul格」に分けられると考えられる。

5 二重対格構文

周知の通り韓国語では二重対格構文と呼ばれる構文が観察される。ところが、以上見てきたように韓国語の「ul/lul」はそのすべてが同質なものではなく、対格の「ul/lul」、意味格の「ul/lul」、主題マーカ―の「ul/lul」に分けられる。従って、今まで二重対格構文と呼ばれてきた構文が真の二重対格(目的語)構文か、否かを再検討する必要がある。4節にあげた(29)～(33)の例文はいずれも二つの「ul/lul」名詞句を含んでいるが、その中の一つは対格名詞句であり、もう一つは「ul/lul」主題化された名詞句ないしは意味格の「ul/lul格」によって格標示された名詞句である。そのため、これらの例文は二重対格構文ではなく、いわば二重「ul/lul」構文であるに過ぎないとする。しかし(29)の例文は議論の余地がある。(29)を(35)に再びあげる。

- (35) 타로가 하나코를 손을 잡았다.
Taroo-ka Hanako-lul son-ul cap-ass-ta.
太郎-ガ 花子-ヲ 手-ヲ にぎる-タ
'直訳: 太郎が花子を手を握った.'

(35)は全体を表す名詞句と部分を表す名詞句が共に「ul/lul」を伴っている例文である。成(1979)、Kang(1986)等はこのようなタイプの構文を二重対格構文と見なしている。Kang(1986)は二つの「ul/lul」名詞句を両方とも目的語と見なしている成(1979)とは異なり、全体を表す名詞句のみを目的語として認めているが、部分名詞句の「ul/lul」をも動詞によって付与される対格助詞であると見なしている。本稿では成(1979)、Kang(1986)に従わず、目的語は部分名詞句のみであり、全体名詞句は目的語ではないと考える。それは次の

(36) aの全体名詞句のみを目的語とする(36) bが不適格になることからわかる。即ち、(36) aの全体名詞句が目的語でないため、(36) bが不適格になるのである。

(36) a. 타로가 하나코를 손톱을 깎았다.

Taroo-ka Hanako-lul sontop-ul kkakk-ass-ta.
太郎-ガ 花子-ヲ 爪-ヲ 切る-タ

‘直訳：太郎が花子を爪を切った。’

b. *타로가 하나코를 깎았다.

*Taroo-ka Hanako-lul kkakk-ass-ta.
太郎-ガ 花子-ヲ 切る-タ

‘直訳：太郎が花子を切った。’

また、Kang (1986) では全体名詞句が目的語であると見なす根拠として全体名詞句のみが受動文の主語に成り得ることをあげているが、これもその根拠にはならない。何故ならば、韓国語には能動文の目的語でない名詞句が受動文の主語に立つ間接受動文+IIが許されるためである。

以上に見るように(35) (36) aのような構文の全体名詞句は目的語ではない。また、それは動詞の必須項でもない。従って、全体名詞句に現れる「ul/lul」は主題マーカークの「ul/lul」であり、(35) (36) aのような全体名詞句と部分名詞句が「ul/lul」で現れる構文は二重対格構文でなく二重「ul/lul」構文と見なすべきである。

なお、(37)のような使役文の場合はいずれの「ul/lul」名詞句も目的語である。しかし、(37)の構造を、(38)のように元の文が使役動詞の補文として埋め込まれたものとして考えると二つの目的語はそれぞれ、上位文の動詞、埋込文の動詞によって対格を付与されると見なすことができる。

(37) 타로가 하나코를 약을 먹였다.

Taroo-ka Hanako-lul yak-ul mek-i-ess-ta.
太郎-ガ 花子-ヲ 薬-ヲ 飲む-サセ-タ

‘直訳：太郎が花子を薬を飲ませた。’

(38) [s 타로가 [VP 하나코를 [s PRO_i [VP 약을 먹]] 였다]]
[s Taroo-ka [VP Hanakoi-lul [s PRO_i [VP yak-ul mek]]-i-ess-ta]]
太郎-ガ 花子-ヲ 薬-ヲ 飲む -サセ-タ

このように、(37)のような使役文に現れる二つの目的語は一つの動詞によって対格を付与されるものでないため、(37)のような使役文を二重対格構文と見なすのは妥当ではないと考えられる。

以上に見るように、韓国語の二重対格構文と呼ばれる構文は、その構文に現れる二つの「ul/lul」名詞句の両方が一つの動詞の目的語である場合がないということから、二重対

格構文ではなく、二重「ul/lul」構文と見なすべきである。

一方、日本語では、Harada (1973) 等に指摘されているように二重「ヲ」制約があり、一つの文の中にヲで格標示される名詞句が二つ以上現れないとされている。そのため、(37)の韓国語文に対応する日本語文は次の(39)のように非文になる。

(39) *太郎が花子を薬を飲ませた。

しかし、日本語にも次のように二重ヲ制約を違反しているかのように見える文が観察される。

(40) a. 太郎は次郎を、無理矢理、門をとおした。

b. 土砂降りの雨の中をグラウンドを走った。

(杉本1986)

c. それから、四五日たった日の午前、加茂川の河原に沿って、粟田口へ通う街道を、静に馬を進めてゆく二人の男があった。(C-ROM版 新潮文庫の100冊)

これらの例文に現れている「ヲ」名詞句の組み合わせをみると、対格の「ヲ」で格標示された名詞句と意味格の「ヲ格」で格標示された名詞句の組み合わせ(40a, c)もしくは意味格の「ヲ格」で格標示された名詞句のみの組み合わせ(40b)になっている*12。即ち、(39)のように一つの文に現れる「ヲ」名詞句の両方が対格名詞句(目的語)でなければ、日本語にも二重「ヲ」構文が許されるのである*13。従って、日本語における二重「ヲ」制約は対格の「ヲ」に限られるものであると考えられる。

6 まとめと今後の課題

本稿では日韓両言語の「ヲ」と「ul/lul(을/를)」をそれぞれ、「対格」「ヲ格」と「対格」「ul/lul格」「主題マーカ-のul/lul」に分けて対照分析してみた。「対格」は目的語を表す働きをする「ヲ」「ul/lul」であり、「ヲ格」「ul/lul格」は目的語を示す働きはしないが、移動動詞構文などにおいて動詞の必須項を表す意味格の「ヲ」「ul/lul」である。そして、韓国語のみに現れる主題マーカ-の「ul/lul」は、動詞の必須項でない文の成分に現れる「ul/lul」である。「ヲ格」と「ul/lul格」は日韓両言語に見られ、類似した振る舞いを見せるが、次のような相違点も観察される

①日本語の「ヲ格」は移動の[着点]を表す名詞句を格標示できないが、韓国語の

「ul/lul格」は[着点]を表す名詞句を格標示できる。ただし、「ul/lul格」も動詞の意味の違いによって[着点]を表す名詞句を格標示できない場合もある。

②韓国語の「ul/lul格」は‘cwuta(주다)’ (=あげる)のような動詞の[GOAL]名詞句

にも用いられるが、日本語の「ヲ格」は用いられない。

本稿では「ヲ格・ul/lul格」と主題マーカ－の「ul/lul」を中心に考察したが、「対格」の場合も日韓両言語の間に違いが見られると予測される。また、本稿では日韓両言語の「ヲ」「ul/lul」を下位分類し、それをもとに対照してみたが、「対格」「ヲ格・ul/lul格」「主題マーカ－のul/lul」の意味に関しては十分考察していない。これらの問題に関しては、今後の課題にしたい。

<注>

*1 本稿では語彙的な意味を持つ格を意味格と見なし、対格の「ヲ」は目的語を表す文法的機能のみを持ち、語彙的な意味は持たないと考える。一方、三宅(1996)等は「ヲ」格はすべて意味的に空虚であると仮定しているが、この問題に関しては今後の課題にしたい。

*2 韓国語に関しては本文の(8)(9)のような、使役化における被使役主の「ul/lul」マーキングによるテストが適用できない。韓国語では使役化される動詞の自・他に関係なく、被使役主を対格の「ul/lul」で標示できるためである。

*3 主題マーカ－の「ul/lul」と主題を表す韓国語の「un/nun(은/는)」(=ハ)、日本語の「ハ」との意味上の違いは、主題マーカ－の「ul/lul」は「非対照的対立」の意味特性を持つものに対して、「un/nun」と「ハ」は「対照的対立」の意味特性を持つ点にある。

*4 4節で後述するように‘cwuta(주다)’(=あげる)動詞の[GOAL]名詞句に現れる「ul/lul」は主題マーカ－でなく、移動動詞構文に現れる「ul/lul」と同様に格助詞と見なす。なお、本稿では対格の「ul/lul」と移動動詞構文などに現れる意味格の「ul/lul」以外のすべての「ul/lul」を、任(1972, 1987)、李(1988)の用語をそのまま引用し、「主題マーカ－」と呼んでいるが、これらの「ul/lul」を主題マーカ－と呼ぶのが妥当であるか否かに関しては再検討が必要である。「ul/lul」主題化の意味としてあげられている(12)のような意味特性を考慮すると、この場合の「ul/lul」は主題マーカ－でなく、焦点を表すマーカ－と見なすこともできると考えられる。この問題に関しては今後改めて触れることにし、本稿ではとりあえず任(1972, 1987)、李(1988)に従い、「主題マーカ－」という用語をそのまま使うことにする。

*5 本稿では、移動の場所を表すものを[起点][経路(経由点を含む)][着点]に分けて分析する。

*6 日本語にも、旅行広告などでは[着点]が「ヲ格」で標示される「北海道に行く」のような文が見られる。しかし、この場合の「行く」は「動き回る」という意味合いを持ち、場所名詞句「北海道」は[着点]ではなく、[経路]と解釈されるべきではないかと考えられる(上記の例文は北原保雄、深見兼孝両先生によるものである)。

*7 歩く(=걷다)、走る(=달리다)、這う(=기다)のような動詞は寺村(1982)の指摘の通り、移動の様態に重点があるときは経路を示す補語がなくてもいい。本稿ではこのタイプの動詞は考察の対象外とする。

*8 本稿での考え方によると、次のような文において[着点]が現れると[起点]を「ヲ格」「ul/lul格」で標示できない現象が説明できる。

(1) a. 太郎が部屋*を/から庭に出た。

(三宅1966)

b. 타로가 방*을/에서 정원으로 나왔다.

Taroo-ka pang-*ul/eyse cengwuen-ulo nawa-ss-ta.

太郎-ガ 部屋-*ヲ/カラ 庭-へ 出る-タ

上記の例文で場所名詞句を「ヲ格」「ul/lul格」で標示した場合、その場所名詞句は移動の行われる[起点][通過部分][着点]全部を一まとまりとして表すものと捉えられ、動詞から直接的な影響を

受けるものとして対象化される。この文に更に「着点」を表す要素を入れると、本文の(23)(24)の場合のように非文になるのではないかと考えられる。

*9 李(1988)は(28)(=4a)に現れる時間名詞句に標示される「ul/lul」を「対格」の「ul/lul」と見なしているが、このような時間を表す名詞句は省略できるということなどから、この場合の「ul/lul」も主題マーカの「ul/lul」と見なすべきであると考えられる。

*10 数量詞名詞句が「ul/lul」で標示される(30)のような構文を任(1972)、成(1979)では真の二重目的語構文と見なしているが、本稿では李(1988)と同様に「ul/lul」で標示される数量詞名詞句は目的語でなく、主題マーカの「ul/lul」によって主題化されたものと見なす。

*11 韓国語に見られる間接受動文は能動文の属格名詞句が受動文の主語に立つ場合のみである。韓国語には自動詞文からの間接受動文は許されない。

*12 杉本(1986)では(40b)の「雨の中を」の「ヲ」を付帯状況を表す「ヲ」とし、移動動詞構文に現れる意味格の「ヲ」とは区別している。

*13 杉本(1986)は(40a)で「ヲ」名詞句の間に介在している要素を省略すると不自然に感じられることから、日本語では「ヲ」で標示される名詞句が連続に現れることを嫌うとし、「「を」格名詞句連続制約」を設定しているが、これは本稿での議論とは違うレベルのものと考えられる。実際に(39)の場合は二つの対格名詞句の間に他の要素を入れても不適格である。

(39) *太郎が花子を無理矢理薬を飲ませた。

<参考文献>

- 奥津敬一郎 1967 「自動化・他動化および両極化転形—自・他動詞の対応—」『国語学』70:46-66.
国広哲弥 1967 『構造的意味論』三省堂
杉本 武 1986 「格助詞—「が」「を」「に」と文法関係—」奥津敬一郎・沼田善子・杉本武『いわゆる日本語助詞の研究』:227-380. 凡人社
—— 1995 「移動格の「を」について」『日本語研究』15:120-129. 東京都立大学
田中茂範 1997 「空間表現の意味・機能」中右実(編)『日英語比較選書第6巻 空間と移動の表現』:1-123. 研究社出版
寺村秀夫 1982 『日本語のシンタクスと意味 第1巻』くろしお出版
三宅知宏 1996 「日本語の移動動詞の対格標示について」『言語研究』110:143-168.
山田 進 1981 「機能語の意味の比較」国広哲弥(編)『日英語比較講座第3巻 意味と語彙』:53-99. 大修館書店
成光秀 1979 『국어 조사의 연구 (国語助詞の研究)』螢雪出版社
李珣鎬 1988 『國語 格助詞 ‘을/를’ 의 연구 (国語格助詞 ‘을/를’ の研究)』塔出版社
任洪彬 1972 「국어의 주제화 연구 (国語主題化研究)」『國語研究』28.
—— 1987 『국어의 재귀사 연구 (国語の再帰詞研究)』신구文化社
Harada, S-I. 1973. Counter Equi NP Deletion. *Papers in Japanese Linguistics* 11(1986):157-201.
Kang, Y. S. 1986. *Korean Syntax and Universal Grammar*. Seoul:Hanshin Publishing co.

付記: 本稿は、「韓国語シンポジウム(於筑波大学、1997年11月29日)」で行った口頭発表の内容にやや修正を加えたものである。発表会場では北原保雄先生、奥津敬一郎先生、塚本秀樹先生、深見兼孝先生、野間秀樹先生など、多くの方々から貴重なご助言をいただいた。また、本稿をまとめるに当たっては、指導教官である高田誠先生からご指導をいただいた。心から御礼を申しあげる。なお、内容の不備な点に関する責任はすべて本稿の筆者にある。